

泉麻人の昭和サブカルチャー50年史



話題は昔のエピソードからアニメ界の未来へ...

の表現の仕方があるんじゃないか」と始めたわけなんです。結局、50年続いちゃった。東芝はあんなになっちゃったけど(笑)。サザエさんはテレビアニメの最長放送ですから、アニメの企画にタブーはないのです!

鈴木 話は戻りますが、手塚先生のことで、忘れられない思い出があるんです。市川崑さんの監督で、「火の鳥」を実写化(78年)した時、先生に頼まれてアニメ部分を作ったんです。先生も仕事を押し付けて悪いと思われたんでしょうね、その年の暮れに突然、「ロサンジェルスに行きませんか?」

って誘われたんです。泉 それでご同行されたんですか?

鈴木 もちろんですよ!(笑)。その時、ディズニーのスタッフでも指折りの達人、ウォード・キンボールさんの家に遊びに行つたんです。「ピノキオ」のコオロギ、ジミニ・クリケットを描いた人です。私も先生も彼の大ファンで。庭にコレクシヨンの本物の蒸気機関車が走る大邸宅を本人に案内されて、もう夢のようでした。その後、一緒にレストランに行きました。席についてすぐ、手塚先生がナプキンを取って、サラサラッとジミニ・クリケットを描いたんです。「僕、以前にピノキオの漫画本を描いたことがあるので、今でも描けるくらい好きなんですよ」って。そしたらキンボールさんが「明日、スタジオにいらっしやい。仕事がありますよ」。あれは

本当に愉快でした(笑)。泉 鉄腕アトムから半世紀余り。今のアニメの状況をどのように思われますか? 驚異 技術の進歩がすごいですよ。昔はセル画を塗る絵の具の質がとても悪くて、鈴木さんのいた、おとぎプロが苦労してムラのない塗料を開発したりしたのに、今はCGですからね。

鈴木 おとぎプロも初期はポスターカラーで塗ったりしてムラがひどかったですよ。僕たちはディズニーに影響を受けたんですが、今は欧米が日本に寄ってきている。ロスでキンボールさんに「なんで日本のキャラはあんなに目が大きくてキラキラしているんだ?」って聞かれたのに、最近のディズニーのキャラは目が大きいでしょ(笑)。驚異さんの言うように、技術の進歩もどこまで行くのか...。先が楽しみです。

テレビ漫画のシール帳

といったフリカケ(もう一つ「チズハム」という洋食センスのフリカケがあった)の袋内に入っていて、オリンピックが近づくと頃にはエイトマンが参加国の国旗の前でポーズを取るシリーズに変わった。僕は小2の頃からみるみる太り出して、デパートで肥満児サイズの半ズボンを探すようになったのだが、こんなエイトマンシリーズを集めるべく、フリカケのゴハンを食べまくったのが一因かもしれない。

ノートに貼り集めたシールのなかで、とりわけ思い出深いのが、「狼少年ケン」の動物キャラクタ「ケン」の動物キャラクタ「ケン」のシールだ。ケンのシールは「森永まんがココア」という粉末のココアのオマケとして入っていた。主



泉さんのシール帳に今も残る「青いクマ」のシール

人公のケンと相棒のオオカミの子。ポッポとチツチ、ボス、ウォーリー、ブラック、ゴリラ、イノシシ、片目のジャック...とおなじみの面々のシールが並ぶなか、クマのシールだけ端っこが折れ曲がって、妙に汚れている。そう、この青いクマのシール、ココアを買ってもし一向に出なかったのだ。そんなある日、いとこの家に遊びに行つてかくれんぼをしているとき、僕が隠れた子供部屋のピアノかオルガンの側面に青光りするクマのシールを発見、たぶんかくれんぼが一旦終わった後だっと思ったが、すーっとそこに行つてひっぱがし、ちり紙か何かに包んでこっそり持って帰ってきてしまった。

テレビ漫画の夜明けの頃の、小さな犯罪である。

人工透析

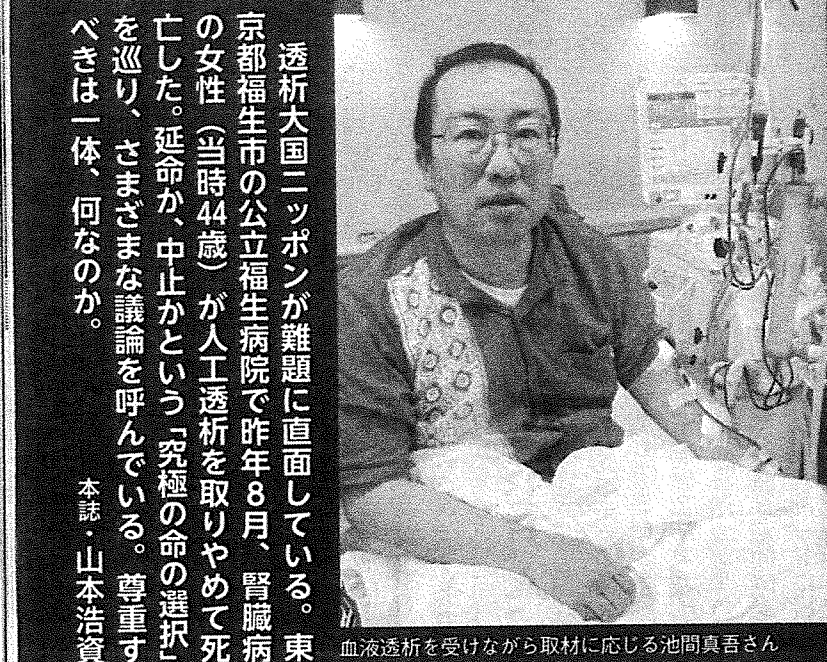
究極の命の選択

延命が、中止か
今、医療現場で
何が起きているのか

総力特集



東京都福生市の公立福生病院。昨年8月人工透析を取りやめた女性が死亡した



血液透析を受けながら取材に応じる池間真吾さん

3月下旬。東京・池袋の喫茶店で、一人の男性が長袖シャツの左袖をまくりあげた。「やっぱ、痛いですよ。針を刺す時は」

沖繩・宮古島在住の池間真吾さん(48)。腕の血管が太く膨らんでいる。人工透析を受けるため、手術で動脈と静脈をつなぎ合わせた「シャント」があるためだ。透析歴は10年になる。

広島の放送局で報道記者だった30歳の時、会社の健康診断でたんぱく尿を指摘されたが、夜討ち朝駆けの

勤務を続けた。好きだった旅の仕事をするため34歳で脱サラし、沖繩に移住。民宿やレストランを経営し、仕事は順調だった。

激務を続けた。好きだった旅の仕事をするため34歳で脱サラし、沖繩に移住。民宿やレストランを経営し、仕事は順調だった。

東京福生市の公立福生病院018年、腎臓病の女性(当時)が人工透析を取りやめて死亡した。女性は同年8月9日、透析のために設けられる腕の血管の分岐「シャント」が閉塞した状態で受診。医師は手術で鎖骨付近にカテーテルを入れる治療法を提示したが、は拒否したとされる。透析は中止、女性は同16日に死亡した。

腎臓移植なき透析中止は「死味する。患者や家族の同意は得られたのか、透析中止の説明に行われたのか。東京都や透析医学会が調査を進めている。

論点メモ

人工透析 究極の命の選択

「自営業になった4年で病気が進んだのでしよう。健康診断を受けることもなかったです。たまたま受けた血液検査で腎臓病であることがわかり、透析をした方がいいと言われました」（池間さん）

人工透析を始めると週3回の通院が一生続くことになり、仕事も旅行も思い通りにならない。

「半年透析を拒否し続けた間、尿毒素が体内に回って血管がポロポロになり、内臓からの出血で19回も手術しました」

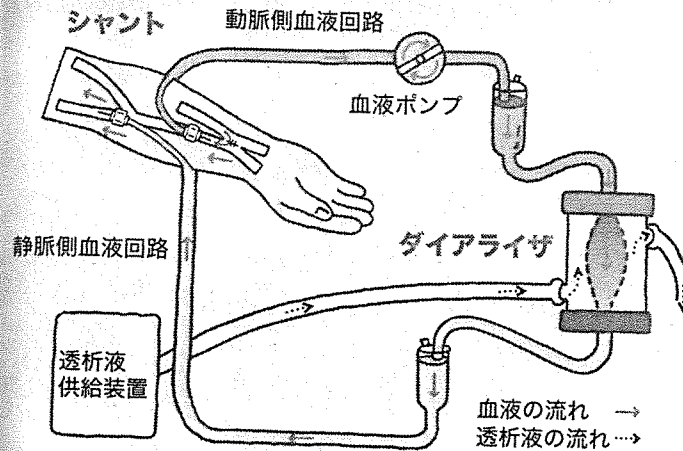
そう振り返る池間さんは今、透析患者が出張や旅行先で困らないようサポートする会社「旅行透析」を経営している。透析患者を全国各地に在宅雇用し、2年かけて日本全国4000以上ある透析医療機関の情報をデータベース化することにも、旅先での透析病院の手配などを提供する。

患者33万人、年医療費1.6兆円

出張先の東京で透析を受ける池間さんに同行し、「東京透析フロンティア池袋駅北口クリニック」に着いた。池間さんは体重を量ると83kg。ベッドに横たわりながら、こう説明する。

血液透析の仕組み

腕の血管（シャント）に針を刺しポンプをラダイザ（透析器）に循環させて尿毒素を除去した後、体に戻す。



「2018年版腎不全 治療選択とその実際」より作成

「今日は5時間受けました。昨日は7時間受けました。一般的に透析は週3回4時間程度と言われますが、体重40kgの人と80kgの人が同じ時間というわけにはいきません。長時間透析した方が体調はいいのですが、そのことを知らない人や、時間の制約があつて受けられない人もいます」

腎臓には、食事をした水を飲んだりして体にたまった余分な水分や老廃物をろ過し、尿を作り出す役割がある。透析療法は腎臓病が進行して腎不全になり、その役割が自力ではできなくなった患者に対する治療法の一つで、専用の装置を使って血液中から老廃物や余分な水分などを取り除く。血液を体外に出して除去用の膜に通した後、再び体内に戻す「血液透析」（上図）が日本ではほとんどだ。池間さんの場合、5時間透

析を受けると体重が3kg減るといふ。

「腎臓は一度壊れるともとに戻らない。生活習慣の改善と定期検査を欠かさないと、再検査と言われたら必ず行くことが大事です」

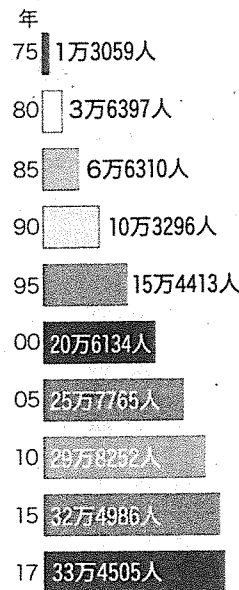
自らを反面教師に、透析患者の実態を情報発信する池間さん。妻と7歳、4歳、1歳の子どもの生活を守るため、透析で命をつなぐ。福生病院の問題については、こんな感想を述べた。「家族からの腎臓移植などほかの選択肢はなかったのでしょうか。44歳とまだ若い。透析中止」という死の選択肢を与えるというのは考えられません」

日本透析医学会の統計によると、2017年末時点で国内の人工透析患者数は33万4505人と年々増加傾向にある（219頁表1）。平均年齢は68.43歳で、原因のトップは糖尿病だ。人口100万人あたり26

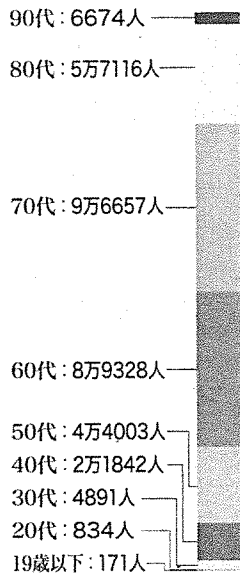
表1 日本の透析患者の現状

日本透析医学会の資料から

透析患者数の推移



透析患者数の年代別割合 (2017年末)



40人、人口比では台湾について世界で2番目に多く、国民の378.8人に1人が透析患者という。透析大国である。血液透析は月40万円程度かかるが、患者の経済的な負担を減らすための公的助成制度があり、自己負担額は月1万〜2万円程度。1人の透析患者の年間医療費は約500万円、国内の透析にかかる医療費は推計1.6兆円に達する。

透析には血液透析のほか、自らの腹膜を使って尿毒素の除去を行う「腹膜透析」

もある。腹部に管を埋め込む必要があり、血管ほど長期間は使えず、10年程度が限界とされ、国内で受けているのは9000人ほどだ。また、日本が諸外国と比べて少ないのが、腎移植である。腎移植や透析療法に詳しい新潟大名教授で大

透析患者の「終末期」とは何か…

日本移植学会の「臓器移植ファクトブック2018」によると、17年の腎移植件数は1742件。親族間の生体腎移植が1544件と大半で、主流となるべき脳死と心停止後を合わせた献腎移植は198件にすぎない。献腎移植希望の登録者は約1万2500人いるが、年1%強しか実施されていなのが現状である。高橋氏が言う。

「腎移植に関する情報が十分伝わっておらず、臓器提供者が少なく、日本人の死生観も影響していると感じています。福生病院の問題は単に事件として取り上げるのではなく、これをきっかけに腎臓病患者の治療が

どうあるべきか議論を深め、尊厳死や患者本人の意思をどのように尊重すべきか考えるべきです」

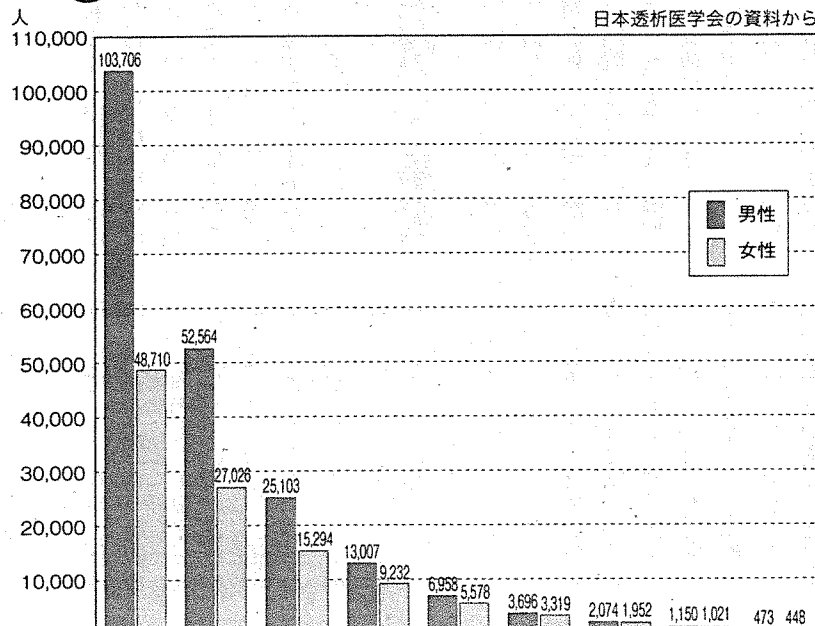
患者の立場からの意見にも今一度耳を傾けたい。イラストレーターの中村益巳さん（53）は38歳の時、血液透析を始めた。幼いころ

に膀胱炎になり、その菌が腎臓に逆流して腎臓機能が弱ったのが原因という。患者同士の交流や透析に関する知識を解説した漫画「透析パンザイ」の著者でもある中村さんが、福生病院の問題についてこう話す。

「透析中止ではなく、患者

表2 透析患者の透析歴と性別 2017年

日本透析医学会の資料から



さんや家族への心のケアが必要だったと思います。通院の透析治療は長時間拘束されるのでストレスがたまりまます。『日本の透析治療は世界一』といいますが、患者の心の問題にも目を向けてほしい」

中村さんは今、在宅血液透析をしている。施設でする血液透析を自宅で行うので、自分の都合に合わせて透析の回数や時間を調整できるため、通院よりも体は楽になったという。

さて、今回の問題の論点の一つに透析患者の「終末期」がある。末期腎不全という病名から「透析患者Ⅱ終末期」とする意見もあるが、日本透析医学会は3月25日、「透析を行っている患者さんは終末期には含まない」と声明を発表した。



「平穏死」を提唱する石飛幸三医師

219歳の表2は、患者の透析歴を示したグラフである。腎臓内科医として約50年間、透析治療に関わる西クリニックの西忠博名誉院長(75)がこう言う。

「透析によって体をコントロールすることで患者は長年にわたって命をつなぎ、ほぼ普通の生活をしていきます。看取りも経験しましたが、余命宣告を受けている患者でも最後まで透析の拒否はありませんでした」

日本透析医学会によると、17年末時点の透析患者の平均透析歴は7・34年。10年以上は27・8%を占め、最長で49年を超える。透析を導入し始める平均年齢は69・68歳と高齢化が進み、さまざま重度の合併症を抱える患者も増えている。

西クリニックでは16年、「終末期にどのような治療を受けたいか」というアンケートを外来患者142人に実施した。対象者の平均

年齢は66・4歳で、その結果について西氏がこう説明する。

「終末期に回復の見込みがない状態になった場合、人工呼吸器や胃ろうなど他の延命治療はほとんどの人が

希望しませんでした。ところが、透析は継続を望む患者が3割いたのです。長年透析を受けながら生きてきた患者にとっては、『透析中止や見合わせ』は重い判断といえるでしょう」

「一般的に女性は血管が細く、シャントが壊れることがある。何度も作り直すのは患者もつらい。『透析をやめたい』と言われたことでもあります」

そう明かすのは、特別養護老人ホーム「芦花ホーム」の常勤医、石飛幸三医師(83)。10年に出版した『平穏死』のすすめで、終末期の胃ろうなど行きすぎた

「平穏死」には「人生会議」が重要

福生病院で人工透析をやめて死亡した女性は、腕の血管に作った透析用のシャントの状態が悪く、新しいシャントを作るのも困難だったとされる。

「本を書いていたころ、知人に頼まれ、週に2回ほど神奈川県内の病院でシャントの手術をしていました。その時に腎臓内科医から透析の知識も学びました」

石飛氏が、その経験をもとにした一つの事例を紹介する。

ホームに入所していた高齢女性は糖尿病に認知症も併発していた。腎臓の機能は限界だったが、「病院から『認知症の人に透析をしても意味がない』と言われた」と、女性の息子が相談してきたというのだ。

「認知症より、糖尿病が進んで起きた尿毒症のため、意識レベルが低くなっていました。透析をすれば尿毒症が軽くなるを考え、透析を勧めました」(石飛氏)

透析を始めた女性は持ち直し、2年ほど調子よく過ごした。ところが、転んで骨折したのを機に不調を訴えるようになり、「透析をやめたい」と言い出した。

「息子とも相談し、穏やかな最期を迎えさせてあげようと、透析をやめました。食べられないからと言って点滴や胃ろうで体に水分や栄養を入れることや、人生の終焉が近づいた本人が望まないのに透析を続けることが果たしていいのでしょうか」(同)

終末期にどのような医療やケアを受けるか、事前に家族や医師らと繰り返し話し合う「アドバンス・ケア・プランニング(ACP)」。厚生労働省はこの取り組みに「人生会議」と愛称をつけ、普及に努めている。石飛氏が、こう力説する。

「医師、家族、患者も含めて本人の人生に関わる人が同じレベルで話し合うことが重要です。一度決めたとしても人間は迷うもの。死と正面から向き合ってこそ、穏やかな死を実現する道につながります」

25年には人口が最も多い



訪問診療する小堀鷗一郎医師

団塊世代が後期高齢者となる75歳を超え、超高齢多死社会が到来する。病院死が7割を占める中、国は終末

透析中止した遺族と医師の決断

埼玉県新座市の堀ノ内病院で、05年から患者の自宅を訪問して在宅医療を担当する小堀鷗一郎医師(81)。医師でもあった文豪、森鷗外の孫である。東大病院などで外科医として勤務し、定年後に在宅医療の世界に飛び込んだ。

昨年出版した著書『死を生きたい人びと 訪問診療医と355人の患者』はその体験記録である。小堀氏が言う。

「看取りの経験を重ねるにつれて学んだのが、個々の患者の最期の希望に合わせていく。オーダーメイド医療です。在宅死が必ずしも正しいとは言いませんが、少ない理由の一つとして、『死は敗北』とする医療・介護側の意識があります」

期医療の現場を病院から在宅へ移そうとしている。その現場で奮闘するベテラン医師を訪ねた。

小堀氏が運転する車の助手席に乗り、訪問診療に同行した。92歳の認知症の女性。息子と二人暮らしで、この日は機嫌が悪いのか、血圧も体温も測らせない。

「こういう日もあります。生活に困っているのか、息子の希望で訪問診療は2カ月に1回にしています」

そう話す小堀氏は、訪問先に着くと持参したキヤンプ椅子に座り、患者や家族と世間話を交えながら様態を診る。趣味は何か、どのような人生を送ってきたのか。死にゆく患者が何をよりどころにしているのか思いを巡らせる。その小堀氏が、透析問題について語り始めた。

「透析を始めるかどうかと

いう段階で、導入しなかった患者もいました。お金がなく、透析をやらない選択をして死んだ人も何人かいますが、趣味の俳句に生きる活力を見だし、90歳になっても週3回透析を受け続けた患者もいます」

生と死の選択。数多くの看取りに接した経験から、こんな言葉を口にした。「生かす医療もあれば、死なせる医療もある。そのターニングポイントを意識して患者に関わることが、これからの医療に必要です」

小堀氏が一人の透析患者の実例を挙げた。94歳の女性。8年数カ月わたって週3回透析を受けていたが、認知症が進行し、最後の1、2年は「透析に行きたくない」と通院する朝は泣いていたという。女性の希望で透析を週2回に減らした後、自宅で一時心停止したこともあり、長男の意思も尊重して透析を中止。

併発していた。腎臓の機能は限界だったが、「病院から『認知症の人に透析をしても意味がない』と言われた」と、女性の息子が相談してきたというのだ。

「認知症より、糖尿病が進んで起きた尿毒症のため、意識レベルが低くなっていました。透析をすれば尿毒症が軽くなるを考え、透析を勧めました」(石飛氏)

約2週間後に亡くなった。「すべては事例に応じた話し合いに基づく医療で、『正解のない問題』であることを医師が認識すること、に尽きると思います」

そう話す小堀氏と長男のメールのやり取りに、その一端が垣間見える。

(母の体力は人工透析に耐えるものではないと苦渋の判断をしました。迷いはありませんが、透析を中止して自宅で死を迎える心構えでおります)

(ご母堂の闘病生活は年齢の点から、すでに限界を超えているように思えます。残された日々をご本人とご家族にとって望ましい形となるように、私どもも協力していきたいと思っております)

患者やその家族一人一人の体や心などさまざまなつらさをやわらげ、納得した最期を迎えるように寄り添う。医療のあり方が今、問われている。